

# САДКО は三万の何を賭けたか ——12世紀から15世紀の通貨について——

福安佳子

## 1. はじめに

ノヴゴロドの代表的なフィリーナである『サトコー (САДКО)』の中で、グースリ弾きのサトコーは海の王の力を借りて運を開き、商業都市ノヴゴロドの繁栄を背景に巨万の富を得る。当時、宴会の席では自慢話と賭け事が宴を盛り上げる題材だったようである。サトコーは大商人になってから、ノヴゴロドのすべての商品を買うことができるほどの富を有することを自慢し、そのことについて賭けをすることになる。

(1) ——Ай же ты Садке да новгородский!

А хошь ударь с намы ты о тридцати о тысячах.

А ударил Садке о тридцати да ведь о тысячах.<sup>1</sup>

(下線筆者 以下同様)

「それでは、ノヴゴロドのサトコーよ、われらと三万賭けるかい！」

そこでサトコーは三万の賭けをした。

この場面では三万に単位がついていないが、サトコーが賭けで負けを取る場面では《денежок》という単位がついている。

(2) А й как пусть побогатее меня славный Новгород,

Что не мог не я да повыкупить

А й товаров новгородских

Чтобы не было продажи да во городи;

А лучше отдам я денежок тридцать тысячей.

Залог свой великий.

А отдавал уж как денежок тридцать тысячей.

<sup>1</sup> Онежские былины, записанные А.Ф. Гильфердингом летом 1871года. Архангельск:Северо-западное книжное издательство, 1983. С.243.

Отпирался от залогу да великаго.<sup>1</sup>

誉あるノヴゴロドよ、我より豊かであれ

町中に商うものがなくなるまで

ノヴゴロドの商品を

我が買い尽くせることのないように

三万の《денежок》は我が与えよう

我の大きな抵当金を

そしてサトコーは三万の《денежок》を支払い

大きな賭けから開放された

この《денежок》は、一般的な意味で“お金”を示すものであって、他に単位が存在するのか、またはこれ自体で当時の単位を示すものであろうか。

本稿では、『サトコー』における、三万という数字が示す単位《денежок》を明らかにすることを目的として、12世紀から15世紀の通貨の状況を細かく分析した、B.Л.ヤーニンの研究《Деньги и денежные системы》<sup>2</sup>をひもときながら、現代に繋がる通貨の歴史を探ることを試みる。

## 2. 《САДКО》のあらすじと年代の想定

《САДКО》の内容をざっと追っておこう。

ノヴゴロドに、サトコーというグースリ弾きが住んでいた。彼は宴会に呼ばれては商人や大地主を楽しませながら生計を立てていた。三日間宴会に呼ばれなかった時、イリメニ湖のほとりでグースリを弾く。三日目に海の王が現われて、サトコーに言うには：「明日の宴会で、“イリメニ湖に金の翼をもつ魚が住んでいることを知っている”と自慢しなさい。それを否定する商人たちと大きな賭けをして、イリメニ湖に魚を捕りに来なさい。三度網を投げ入れたら、一匹ずつ金の魚を入れてあげよう。そうすれば、賭けに勝っておまえは大商人になれるだろう。」サトコーは言われたとおりにして、商品で満ちた6つの商店を手に入れ、ノヴゴロドの大商人の一人になる。商いははじめたサトコーは莫大な利益を得、結婚し、白石造りの館を建てる。彼は全ての男たちを招いて宴

<sup>1</sup> Онежские былины. 1983. С.244.

<sup>2</sup> Очерки русской культуры XIII-XV веков. Ч.1. Материальная культура. М.:МГУ, 1969. С.317-347.

会を開き、それぞれの自慢話を聞きながら、自分は、ノヴゴロド全ての商品を買取ることが出来ることを自慢し、そのことに三万の賭けをする。

翌朝さっそくノヴゴロドのすべての商品を買占めたサトコーは、次の日には多くの商品がモスクワから届いているのを目の当たりにする。そこで「モスクワからの商品を買占めても、海をわたってまた商品が届くだろう。世界中から届く品を買占めることなどできない。サトコーより、ノヴゴドの方が豊かであるとした方がよい」と自ら賭けに負け、三万の掛け金を支払う。買占めた商品を持って、サトコーはキプチャク汗国まで行き、商品を売って大もうけをする。小さい樽に金をつめ、たくさんの大きな樽に純銀を満たし、たくさんの大きな樽に小粒、大粒の真珠をつめてキプチャク汗国を船出するが、途中大海原で嵐に会い、動けなくなってしまう。銀の樽を一つ、その次に金の樽を一つ貢物として海に投げるが、嵐はいっこうにおさまらない。そこで籤に当たったものが海への貢物として入水することにした。籤に当たったのはサトコーであった。サトコーは、海底で海の王に逢い、王のためにグースリを弾く。その間現われたニコーラ・モジャイスキーの忠告に従って、サトコーはグースリの弦を切り、弾くことも歌うこともやめる。海の王が勧める王の娘との結婚も、ニコーラの忠告どおり初夜は過ごさず、翌日無事、自分の船団より早くノヴゴロドに帰り着く。

その後、ノヴゴロドの町に暮らし続けたサトコーは、ニコーラ・モジャイスキーのために白い石造りの聖堂を建てた。

このハッピーエンドの物語の中には、他にも当時の経済状況を窺い知ることの出来る、具体的な記述が存在する。特に下線で示した部分について、原文で詳しくみてみよう。

(3) А й как тут воротил он в Золоту орду.

А й как там продавал он товары да ведь новгородские,

А й получал он барыши топерь великие,

А й как насыпал он бочки ведь сороковки-ты

А й как красного золота;

А й насыпал он много бочек да чистаго серебра,

А еще насыпал он много бочек мелкаго он крупнаго скатняго жемчугу

А как потом поехал он з-за Золотой орды.<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Онежские былины. 1983. С.245.

そこで彼はキプチャク汗国へ行き、  
ノヴゴロドの商品を売りに売り、  
いまや大きなもうけを手に入れる

4行目からの具体的な金、銀、真珠の量を正確に把握するためにもう一つの原文を参照しよう。

- (4) Насыпал он бочки - сороковки красным золотом,  
Насыпал он много бочек да чистым серебром,  
А еще насыпал он бочки скатным жемчугом,  
И поехал он из Золотой орды.<sup>1</sup>

(3), (4) を照合しながら、次のようにその量を記述することができる。

- (5) 彼は40分の1ボーチカ（12.3 ㊦）入りの数個の小さな樽に美しい金を満たし、  
たくさんの大きな樽（491 ㊦入り）に純粋な銀を 満たし、  
たくさんの大きな樽（491 ㊦入り）に、大粒小粒の真珠を満たし、  
キプチャク汗国を後にした。

サトコーが得た富の大きさをあきらかにするために、おおよその時代を想定することが必要である。サトコーがキプチャク汗国に品物を売りに行ったことから、キプチャク汗国の存続年代である1243年から1502年までの出来事であることが第一段階として設定できる。

以下のことを整理することができる：

- ① サトコーはキプチャク汗国（1243-1502）に行った。
- ② 当時の通貨として、金、銀、真珠が用いられ、金、銀を比べると圧倒的に銀の方が多かった。

次に、モンゴル・タタール以前のルーシの通貨の状況を把握し、年代ごとにどのような変化を迎えていったかを、В.Л.ヤーニンの研究により詳しく考察してみよう。

<sup>1</sup> Круглов Ю.Г. Былины. М.: Просвещение, 1993. С.190.

### 3. 12世紀から15世紀の通貨について<sup>1</sup>

#### 1) 9世紀から11世紀まで

9世紀から11世紀にかけて、ルーシは活発な国際貿易をおこなっていた。輸入品のリストには、布、ワイン、染料、香料などが挙げられているが、多くの研究者が忘れていた主な輸入品に、金属、特に銀があった。これは、手工業にとっても、貨幣流通にとっても不可欠なものであった。東ヨーロッパのスラヴ人は自らの銀の採掘場を持たず、外から硬貨の金属を輸入していた。最初はその源は東洋貿易であった。2世紀にわたって、11世紀の初めまで、ルーシは東洋から硬貨を輸入し続けたが、この流れは、東洋の銀の枯渇によってさし止められた。その主な理由は9世紀から10世紀にかけて活発にヨーロッパに銀を輸出し過ぎたことにある。その結果、11世紀の初めから、ルーシの対外貿易の主要相手先は西方になり、主な輸入品はまた銀貨であった。100年の後、西ヨーロッパの硬貨流通もまた危機にみまわれる。その結果、9世紀から既に慣れてきた金属硬貨と、ルーシは後の3世紀近くにわたって離別した経済形態をとることになる。

#### 2) 硬貨不在の時代——硬貨の代用品

12世紀から14世紀にかけて、ルーシの金融システムの中で硬貨が消えている。西ヨーロッパからは硬貨に代わって銀塊(слитка)が入るようになり、硬貨のない時代、銀塊が一時的に流布し、銀の流通の唯一のかたちとして残った。しかし、国内の取引に関しては、硬貨の代わりにバーター貿易が盛んに行われるようになる。市場において、銀塊は硬貨とって代わることはできなかった。銀塊は大きな取引、大きな値段の交換物としてのみ利用できた。銀塊のかたちで賠償金や教会への寄付がなされた。また大きな土地の売買や大きな財産の売買に利用された。しかし、小さな小売業には参加することができなかった。

それでは、何で硬貨は代用されていたのだろうか。このことについて、考古学的に、通常的需求をはるかに上回る量の出土品であるところの物品を、その代用物の可能性の高い品物として挙げることができる。それらの中にまず挙げられるものは、多くの種類の女性用の飾り物、そして粘板岩(スレート)製の紡ぎ車である。ルーシでは、紡ぎ車はただ一箇所の地域でのみつくられていた。ヴォリニ(Волыни)のアヴルーチャ(Овруча)地区であり、そこから全ての東ヨーロッパのスラヴ地区に配布された。紡ぎ車は紡績にとっては不可欠なものであり、どんな古代ロシアの発掘現場でも、屋敷、家から必ず出土した。しかしその量が実際に尋常でない。1951年から1962年のノヴゴロドでの発掘現場(11世紀から13世紀はじめ)から2000以上の粘板岩(スレート)製の紡ぎ車出土した。また

<sup>1</sup> 本章は В.Л. Янин 著 «Деньги и денежные системы»(1969)を翻訳、編集したものである。

それより後の地層（13世紀後半から15世紀）から粘土製、石製、鉛製の紡ぎ車が発掘されたのはたったの約300であった。13世紀においていかなる紡績業の発達もみとめられないことを考慮すると、粘板岩（スレート）製の紡ぎ車が何か別に余分な機能をもっていたと解釈する必要がある。

同様の観察を、11世紀の宝入れで貨幣といっしょに見つかったガラスのプレスレットやいろいろなかたちのネックレスにみることができる。

これらの品物から当時の‘通貨’として使えることの共通点を、次のように解釈することができる。まず第一に、これらは標準的な規格品であること、値段が変化せず、恒常的にある領域に長い期間にわたってとどまるような運命をもったものである。第二にその保存性にある。流通の期間の長さに関係なくその価値を定められる。第三にその安値にある。小さな流通手段の役割を果たすことができる。

しかしながら、これらの商品が東ヨーロッパの全領土において、硬貨のなかった時期、共通の通貨であったかというところではない。文章語の中で《меховая теория 毛皮の理論》とよばれるものがある。それによると、硬貨のない時期の‘お金’は獣皮であった。これによる流通についての裏付けとなる外国人の報告があり、またミニアチュール、いくつかの画架使用の絵画（станковая живопись）によって残されている。獣皮は生産地区や主要な国際市場において、疑いなく‘お金’の役割を果たしたはずである。たとえばノヴゴロド、スモレンスク、外国人の側からの恒常的なニーズが、そのことを（獣皮がお金の役割を果たすことを）保証していた。文書に残された資料が毛皮の‘お金’が独自のシステムでもって15世紀においてまで通常使われていたことを裏付けている。例えば、ドゥヴィンスク（Двинск ダウガピルスーラトヴィア共和国）での資料がある。このような流通システムの生き残りともみられるものを、民族誌学上でみとめられるコミ人やウドムルト人の‘お金’の計算システムにみとめることができる。

硬貨のなかった時代のより複雑な金融システムとしてクレジットの性格を帯びたものの存在も指摘されている。これはいわゆる《меховая теория 毛皮の理論》の信奉者によって《皮の紙幣》のかたちで具現化されたとされているが、このことを裏付ける12世紀に関する資料として《アブ・ハミダのサクラブへの旅 Путешествие Абу-Хамида в землю Саклаб》が存在する。それによれば、“リスの頭と2本の足が一単位となり、18の束で1ディルヘム（дирхем 東ヨーロッパの通貨単位）に相当し、1ジユクン（джукн）とよばれていた。これにより、パンも、女奴隷も、少年も、金も銀も、テンも、すべての物が買えた。この18を束ねる縄にはツァーリの姿が描かれた鉛片が結び付けられていた。誰も‘通貨’としてこれを拒否することはできず、これによって売買をおこなっていた”，という記述である。これによって、生活に必要な日用品を中心に、クレジット的システムが利用されていたことが裏付けられる。この記述はまた、プロムバ（пломба）とよばれるドロギ

チン（Дрогичин — Брестонская область）のタイプの鉛の印の目的についてもあきらかにしてくれる。現在、何千ものプロムバの種類が知られているが、これらはドロギチン・ナドブーシスキー（Дорогичин Надбужский）で生まれたことが発掘調査から明らかである。またノヴゴロドでも、スモレンスクでも、ポーロツクでも、キエフでもリャザンでも、クニャージャヤ ガラー（Княжая Гора — УССР ドニエプルの右岸）でも生産された。ドロギチンタイプのプロムバによって古代の貿易の軌跡を知ることができる。そこには通常税関のマークが見られる。税関マークは貨幣の流通と直接的に関連していたことがわかる。アブ・ハミダ（Абу Хамида）は度量衡の詳細についても確固たる情報を与えている。

ここで、11 世紀、硬貨が流通していた時代にルーシに存在していた通貨単位について言及しなければならない。その単位はクーナ（куна）とグリヴナ（гривна）である。アブ・ハミダが《サクラブへの旅 Путешествие Абу-Хамида в землю Саклаб》の中で述べている具体的な数字を銀に換算すると、次のように解釈することができる。

(6) ベールカ（белка リス）=ヴェーヴェリツァ（веверица）またはヴェーシカ（вешка）  
(12 世紀において、銀 0.16 g に相当)

グリヴナ（гривна） = 50 クーナ（куна） = 銀 49.05 g

(11 世紀より 1 куна = 銀 0.98 g)

18 вевериц = 銀 2.84 g

17 вевериц = 銀 2.78 g

これらは東ヨーロッパで最後に流通したおりのディルヘム（дирхем）のレートに極めて近いものとなっている。

とはいえ、これらのクレジットタイプの金融システムはルーシ全域に普及していたものではなく、地域的にも、時代的にも限定されたものであったことは確かである。

12 世紀から 14 世紀の間にさまざまな‘お金’の流通システムが存在したことは、金融システムが常に変化していたことを示している。

### 3) 硬貨のない時代——銀の流通について

コインのない時代、銀の流通は、銀塊（денежные слитки）のかたちで保存された。12 世紀のはじめ、ルーシには 2 つのタイプの塊（сリートок слиток）が存在した。一つは《北方塊（северный слиток）》とよばれるもので、棒状の形で、文献上、《グリヴナ銀（гривна серебра）》として登場するものである。この‘お金’が流通していたのは、ノヴゴロド、オカ川とヴォルガ川との間の地域、クールスク（Курск）地区、チェルニゴフ（Чернигов）地区の一部である。この塊は（特に 13 世紀まで）普遍的な重さを有して

いた。理論上は、206gの銀であり、実質上は避けられない精錬の際のロスから平均196.2gであった。

もう一方の塊は《ルースカヤ リトラ (русская литра<sup>1</sup>)》とよばれる南方塊であり、六角形の形をした実質上約162gのものである。この塊の理論上の重さは精錬のロスを含めて170.1gである<sup>2</sup>。この塊が流通していたのは、ルーシの南西部であり、モンゴルの襲来により完全に破壊されたキエヴィシナ (Киевщина), チェルニゴフシナ (Черниговщина), ヴォリニ (Волынь), スモレンシナ (Смоленщина) を含む。モンゴル・タタール襲来以降の、この南方システムの存在を語る文献も物品も残されていない。が、モンゴル・タタール襲来の時点で、ルーシに二つの‘お金’を量るシステムが存在したことを、ジュチ<sup>3</sup>の硬貨システムの歴史に継承されていることで認めることができる。ボルガルでの鑄造は13世紀、《グリヴナ銀》を基にはじまった。一方、クリミアでは《ルースカヤ リトラ》が基礎になっていた。ところが、13世紀の後半には、南部の全域で、北方方式の《グリヴナ銀》が広く用いられていたことがあきらかにされている。つまり、13世紀の後半には、全ルーシにおいて、北方方式の《グリヴナ銀》のみが造られていた。モスクワにおいても、リャザンにおいても、ノヴゴロドにおいても、プスコフでもトヴェリでもキエフシナ、スモレンスクでもそうであった。ここで、二つの重要な結論を導くことができる。一つは古代ルーシでは、‘お金’の流通のさまざまなかたちが存在していたこと、もう一つは、ルーシの各地域で、一つの北方方式の量り方を基礎として、その金融システムがつくられていたことである。《グリヴナ銀 (гривна серебра)》、それを構成する《куна》《ногата》《веверица》等の呼び名と指し示すものは各地域で様々であっても、その基礎はこの度量衡に置かれていたことである。

#### 4) 硬貨鑄造のはじまり

硬貨不在の時代は、14世紀後半にルーシの各公が硬貨鑄造に着手したことで終わりを遂げる。この流れに至るまでの道筋を、再び二つのシステムに大別することができる。一つはモスクワシステム、もう一つはノヴゴロドシステムである。この二つのシステムが15世紀の後半に融合して、今日まで用いられている通貨システムのはじまりを築いたと

<sup>1</sup> литра は6世紀から使われていた、お金、重さの単位

<sup>2</sup> 六角形の《слито》の精錬の際の重さのロスについて、初めて言及したのはЭ.И. Кучеренкоである：*Кучеренко Э.И. К вопросу о русской метрологии // Итоговая научная конференция Казанского гос. Университета им.В.И.Ульянова-Ленина за 1963г.(краткое содержание докладов):Секции исторических наук, русского языка и литературы, татарского языка и литературы. Казань:Изд-во КГУ, 1964. С.4. «Деньги и денежные системы» (1969).С.324.*

<sup>3</sup> Джучи チンギス・ハーンの子 (生年不明—およそ1227年)。



いうことができる。我々の知りたいサトコーの時代のノヴゴロドシステムを考察する前に、まず相対するモスクワシステムについて把握しておこう。

### [1] モスクワシステム

モスクワシステムに関して、硬貨不在の時代には文献資料として残っているものは全く存在しないにもかかわらず、モスクワで硬貨鑄造が始まった時点においては、《ロシア法典 Русская Правда》<sup>1</sup> のシステムとかなり近いかたちを保存していることがみとめられる。《ロシア法典 Русская Правда》によるシステムは次のとおりである。

$$\begin{aligned}(7) \quad 1 \text{ グリヴナ銀 (гривна серебра)} &= 4 \text{ グリヴナ(кривнам кун)} = 80 \text{ ナガータ(ногатам)} \\ &= 200 \text{ クーナ(кунам)} = \text{銀 } 196.2\text{g} \\ 1 \text{ グリヴナ(гривна кун)} &= 20 \text{ ナガータ(ногатам)} = 50 \text{ クーナ(кунам)} \\ 1 \text{ ナガータ(ногата)} &= 2.5 \text{ クーナ(кунам)} \\ &= \text{銀 } 2.45 \text{ g} \\ 1 \text{ クーナ(куна)} &= \text{銀 } 0.98 \text{ g}\end{aligned}$$

モスクワ最古の‘お金’は、ドミートリー・ドンスコイの名を印された約 1g のものである<sup>2</sup>。従って、古代のクーナ (куна) と度量衡的一致をみるが、13 世紀から 14 世紀にかけて、クーナ (куна) という用語は、当時の単位では用いられなかった。この言葉は硬貨鑄造のはじまりと同時に、銀貨 デンガ (денга)<sup>3</sup> として具現化をみることになる。13 世紀から 14 世紀のモスクワシステムを再現すると、次のようになる。クーナ《куна》は、

<sup>1</sup> 古代ルーシの封建制的法規。《Закон Русский (古代ロシア, 9-10 世紀の生活基準)》, ヤロスラフ賢公の法 (Правда), ヤロスラーヴィッチの法 (Правда), ヴラジーミル・モノマフの規則 (Устав) 他を含む。

<sup>2</sup> ドミートリー公は 1380 年, ドン川上流クリコヴォの戦い Куликовская битва でママイ汗軍に大勝, ドミートリーは以後ドンスコイと呼ばれる。Янин は硬貨鑄造を可能にしたものは, モンゴル・タタールとの戦いのプロセスにおいて準備されたとしている。多くの割拠した公国の弱体化の代わりに歴史の舞台に登場した少数の大きな公国, 経済的に強力な国家によってのみ可能であった。《汗国への貢納》システムもこのプロセスに一役買った。汗国への貢物はルーシにおいては一つにまとめられた宝石庫で集められ, まず先に金帳汗国のハーンの手にとられた。モンゴル・タタールへの勝利は, 大公たちに全権力だけでなく, 発達した税金システムまでもたらした。これを利用しながら大公たちは彼らの金庫に入ってくる大量の収益金の検査官, 管理官となった。このような組織をつくることのみが, ルーシ独自の鑄造に踏み切ることを可能にした。Очерки русской культуры XIII-XV веков. Ч.1. Материальная культура. М.: МГУ, 1969. С.320.

<sup>3</sup> 《денга》については 14 頁参照。

別のモールトカ《mortka》という言葉によってかわられる。最古のモールトカ《mortka》の用法を、ノヴゴロドの白樺文書№.108 にみることができる。地層学的に 1197 年から 1224 年と推定できることから、クーナ《куна》からモールトカ《mortka》への移行はモンゴル襲来以前の 13 世紀の初め以前であるとする事ができる。

(8) 1 グリヴナ銀(ルーブル)	= 10 グリブナ	= 100 レーザナ	= 200 モールトカ = 銀 196.2 g
гривна серебра (рубель)	гривнам	резанам	морткам
	1 グリブナ	= 10 レーザナ	= 20 モールトカ = 銀 19.26 g
	гривна	резанам	морткам
		1 レーザナ	= 2 モールトカ = 銀 1.96 g
		резана	морткам
			1 モールトカ = 銀 0.98 g
			мортка

後期のモスクワの硬貨システムと《ロシア法典》の古代の通貨システムのもう最も顕著な一致のひとつに 5 をベースとした計算方法の保存がある。この状況の意義を重視しながら、13 世紀から 14 世紀にかけてのノヴゴロドの貨幣システムの歴史に移ることにしよう。

## [2] ノヴゴロドシステム——ルーブルの登場——

硬貨のなかった時代、銀の流通形態として銀塊が製造されていたことは 3) において考察した。北方方式の計量単位の塊銭を研究して、ソートニコヴァ (М.П.Сотникова) は鑄造にあたってほとんどの銀貨が 2 回型に流されていることを発見した<sup>1</sup>。まず、基本的な量の溶解金属が流し込まれ、それから少量の注ぎ足しがおこなわれた。このような 2 回に分けての鑄造法の意義としては、一回目と二回目の溶解銀の質が違うことにある。最初の方が質の悪い銀、あとの方が上質の銀が使われた。全体としてその変わらぬ重さ 196g を保ちながら、実際には約 170g の良質の銀に相当している。疑いのないことは、二度鑄造法の銀塊 (слитка) はノヴゴロドの ルーブリ (рубель) であったことである。年代記によれば、ノヴゴロドで рубль は 1448 年まで鑄造された。つまりその時期、その隣で同時に硬貨が鑄造されていたと考えられる。しかし、この時代の文献は рубль というとき、銀塊 (слиток) と硬貨ルーブル (монетный рубль) の区別をしていない。

<sup>1</sup> Сотникова М.П. Из истории обращения русских серебряных платежных слитков в XIV-XV вв. (дело Федора Жеребца, 1447 г.) // Советская археология. 1957. №3. // Очерки русской культуры XIII-XV веков. С.328

北方方式の計量単位の銀塊(слиток)を年代的に2つのグループに分けることができる: 12世紀から13世紀にみられる長いもの(14から20cm), 曲がった側面をもった14世紀から15世紀はじめにかけての短いもの(10から14cm)である。二重鑄造にみられる塊(слиток)は短くて曲がったグループのみとなっている。一番古い二重鑄造のデータは14世紀の半ばに存在する。

ノヴゴロドの170.1gのルーブリ(рубль)は13世紀から14世紀の境であらわれたと想定できる。13世紀すべての流れにおいて, ノヴゴロドの貨幣システムにおいて一番強い単位として《グリヴナ銀 гривна серебра》が古くからと同じく用いられていた。最後にこの言葉の用法が見られるのは1316年のことである。しかしながら13世紀の終わりにはじめて新しい用語ルーブル《рубль》とその随伴用語パルティーナ《полтина(半ルーブル)》があらわれた。このとき以来, 《рубль》はノヴゴロドの貨幣システムの中で主要な役割を演じ続けている。《рубль》の一番古い用法は地層学的に1281年から1299年と推定されている白樺文書№65の中にみることができる。

ノヴゴロドシステムにおいて特長的なのは, 7を算定基準においていることである。ホロシケーヴィッチ(A.Л.Хорошкевич)は19世紀に出版されたが古銭学者の目にもとまらずに, 以来忘れられていた1399年の記録(Тевтонский орден チュウトン騎士団の貿易に関する記録)に注目した。この記録は硬貨のなかった時代のノヴゴロドの貨幣システムの構造を知る上でたいへん重要なものである。このシステムについて詳細に描写している。《大ノヴゴロドでは13 маркшейнが1 штюккеを構成していた。また28 мартхоуптеが1 маркштейнを構成していた。このように1 штюккеの重さはノヴゴロドの方が, リボニア(Ливония バルト海東岸の地名, 特にドイツ騎士団の支配した現ラトヴィア, エストニアをさす)のどの町より重かった。》

A.Л.Хорошкевичは不用意に書かれた《маркштгейн》が誤りで, 正しくは《марк шин》であるとしている。ロシアの用語《гривна кун》は常にこのようにドイツ語に訳されていた。《Штюкке》も同じようによく知られた用語であった。塊(слиток)がそれらによってあらわされた意味であり, この場合, 《рубль》のことである。《Мартхоупте》は《кунья головка》, 《куна》の概念の文字どおりの訳である。従って, 1399年の記述によってノヴゴロドの金銭システムを次のように提示することができる。

$$\begin{aligned} (9) \quad 1 \text{ ルーブル (рубль)} &= 13 \text{ グリヴナ クン (гривнам кун)} \\ &1 \text{ グリヴナ クン (гривна кун)} = 28 \text{ クーナ (кунам)} \end{aligned}$$

一番重要なことは14世紀の終わりにはノヴゴロド グリヴナの中での関係として既に7をベースとした数え方が構築されていたことである。

13 世紀のノヴゴロドでの 7 進法の ‘お金’ の数え方について多くの白樺文書に示されている。それ以前には出くわすことのなかった貨幣単位セムニーツァ《семница》が載っている。語源的に語根の 7 (семь) と結びついている。この用語は №. 218, 349, 355 に観察できる。最初の二つは 1268 年から 1281 年の間の地層から発掘された。

これらすべての観察はノヴゴロドシステムの構造のたいへん早い段階の形成をものかたる。7 を基準の計算法は《рубль》の出現よりずっと前に確立された。12 世紀から 13 世紀の境より以前のことである。

もう一つ重要な用語《ногота》はノヴゴロドの資料の中で 14 世紀の初めまでにあらわれる。《ногота》は 13 世紀には 7 分の 1 グリヴナを構成していたことを考慮すれば、その交代としてどのような用語が登場するか、容易に言い当てることができる。14 世紀から 15 世紀の資料の中に一度ならず貨幣単位《бела》がでてくる。これは 2 денгам に相当する。ノヴゴロド グリヴナは 14 денег なので《бела》は《гривна》の 7 分の 1、このことは古い《ногота》と《бела》が一致することを示す。実際、ノヴゴロドの羊皮紙や白樺文書をみてみると、13 世紀の後半にあらわれたこの新しい金銭用語は、コインのない時代の終わりに広く用いられている。

1339 年のデータによって、14 世紀のノヴゴロドのルーブルを筆頭にした金銭システム、を次のように復元することができる。

$$\begin{aligned} (10) \quad 1 \text{ ルーブル (рубль)} &= 13 \text{ グリヴナ (гривнам)} = 91 \text{ ベラー (беле)} = 364 \text{ クーナ (кунам)} \\ &= \text{銀 } 170.1 \text{ g} \\ 1 \text{ グリヴナ (гривна)} &= 7 \text{ ベラー (белам)} = 28 \text{ クーナ (кунам)} = \text{銀 } 13.08 \text{ g} \\ 1 \text{ ベラー (бела)} &= 4 \text{ クーナ (кунам)} = \text{銀 } 1.87 \text{ g} \\ 1 \text{ クーナ (куна)} &= \text{銀 } 0.467 \text{ g} \end{aligned}$$

この復元されたシステムは 13 世紀の終わり以前に成立しなかったことは確かである。まさにその時、初めて資料の中に《рубль》, 《бела》といった用語が現われた。さらに、この復元資料を出発点として、より以前の、13 世紀のノヴゴロドの金銭システムを想定することができる。ここでは前に想定した《бела》と《ногота》が等しいことがうたわれている。それによると、1 グリヴナは 7 ナガタで、このシステムの中心には長い塊、純度の高い 196.2 g の《гривна серебра》がある。

13.08 g の《短い》ノヴゴロド グリヴナと《гривна серебра》を比べると、長い《гривна серебра》にはちょうど 15 の短いノヴゴロド グリヴナが含まれることがわかる。

ノヴゴロドの 13 世紀の金銭システムを上記の資料をもとに次のように想定することができる。

- (11) 1 グリヴナ銀 (гривна серебра) = 15 グリヴナ (гривнам) = 105 ナガター (ногатам)  
= 420 クーナ (кунам) = 銀 196.2 g  
1 グリヴナ (гривна) = 7 ナガター (ногатам) = 28 クーナ (кунам) = 銀 13.08 g  
1 ナガター (ногата) = 4 クーナ (кунам) = 銀 1.87 g  
1 クーナ (куна) = 銀 0.467 g

### [3] モスクワシステムとノヴゴロドシステムの分化について

(11)のノヴゴロドシステムは、資料の中で《гривна из ногат》と引用されはじめた13世紀初めには存在していたことは疑いない。同じ時期に《мортки》ということばが、13世紀の初めのテキストに初めて引用されていることは、モスクワシステムが既にこの早い時期に存在していたことをものがたっている。まさにこの時期、ノヴゴロドシステムとモスクワシステムとに度量衡法的ベースが分化したと考えられる。実際に、このシステムを支える単位(196.2 g)の絶対的な等しさのうえに、一つのシステムは《гривна серебра》が100の小さい単位で割り切れるものになり、もう一方のシステムは105の小さい単位で割り切れるものに分かれたのだろうか。

この分化は銀を流し込む製造工程で生まれたところの計算の中でおこったと考えられる。実際、《гривна серебра》の論理的な重さ(206 g)と実質的な塊(слиток 196.2 g)とよばれるものの違いを比べてみると、上にあげた大きさは、105と100の関係に容易に結びつけることができる。どのようにして、《гривна серебра》の論理的なものと現実的な重さの違いが生まれたのであろうか。

その鑄造にあたって100個の小さな銀(コインまたは銀くず)の総量206 gが使われた。これが、11世紀の、まだ銀塊(слитка)が鑄造されていなかった時代の《гривна серебра》の大きさであった。しかしながら、精錬の過程で、避けられない金属の損失、いわゆるロス(目減り)が生まれ、その結果二重の結果を生み出すことになる。まず第一に銀は混入物(鉄や鉛)から離され、純化する。それはこれらの混入物が銀よりもよく燃えるからである。よって、銀の質は少し上がることになる。第二に、精錬の過程で銀自身も少しの量燃焼し、したがってその量も、銀塊(слиток)に仕上がった時、原材料の時よりも少なくなる。

銀塊(слиток)鑄造の最初の段階では、原材料として純度の高いデナリウス(古代ローマの銀貨)が用いられており、その質は、それらから鑄造された銀塊(слиток)とかわらなかつた。つまり、この時代には、銀塊(слиток)の鑄造には、避けられない、全く目立った銀の損失があつた。重さの減少は実質的に金属の質を向上させることで埋め合わせが

つかなかった。ここからパラドックスがうまれる：二つの実質的には量の等しくない貴金属が等しいものと判断される。総量 206 g の 100 個の銀が、約 196 g の 銀塊 (слиток) と同じ価値にみなされる。もとの銀の量を 206g とみなすか、196 g とみなすかによって、一方ではこれを 100 に分け、一方では 105 に分けるという分け方の違いが生まれ、これが最終的にモスクワシステムと、ノヴゴロドシステムに分化する要因になった。

#### [4] 《денга》について

モンゴル・タタールとの戦いのプロセスにおける商品生産の回復、大きな公国の台頭が 14 世紀の後半にルーシの硬貨製造再開の条件をつくった。

[1] において考察したように、ロシアの硬貨製造はモスクワで始まった。14 世紀の 70 年代であると考えられる。モスクワとほとんど同時にリャザンとニージニーノヴゴロドで製造が始まった。トヴェリ、ノヴゴロド、プスコフではかなり遅れて、15 世紀の第一四半期に始まっている。硬貨製造が同時に始まったのは、モスクワ ルーブルが用いられていた地域である。これらの地域では、商品の流通において密接なかかわりをもっていたと考えられる。北西地方の流通は、モスクワ圏とはかなり孤立していたと考えられる。この地方ではモスクワ圏に対して銀塊 (слиток) を転売する特別な条件が備わっていた。ノヴゴロドは銀塊 (слиток) 製造の中心地であった。それらをコインに変えるより、その方がよほど儲けになったのであろう。

モスクワでの硬貨製造は古い、慣れた基準、モールトカ 《mortka》 0.98g を使うことで始まった。硬貨システムは硬貨の無かった時代のモスクワシステム、ルーブル 《рубль》、グリヴナ 《гривна》の重さ<sup>1</sup>を継承している。しかし、自国のコインをもつに当たって、新しい名前も必要になった。モスクワ人たちは自分のコインをモールトカ 《mortka》ではなく、デーンガ 《денга》とよんだ。3 《денга》が、1 《алтын》を構成した。

これらの新しい言葉のニュアンスによって、長い間、モスクワの硬貨製造はジュチの硬貨基準に拠っていたと考えられていた。モスクワの《денга》は、ジュチの《дирхем》を模倣したものか、ジュチによってつくられたものではないかとされてきた。新しい用語がキプチャク汗国から、新しいコインの基準とともにやってきたように思わせていた。

しかし我々はすでに、モスクワ《денга》に何もキプチャク汗国的なものはないことを考察した<sup>2</sup>。

しかしながら、《алтын》も語源的にロシア語ではなく、キプチャク汗国との貨幣流通と何らかの関係があることは確かである。この用語はジュチの硬貨が流通したことの一度も

<sup>1</sup> 9 頁, (7)を参照。

<sup>2</sup> 8 頁参照

無いモスクワで生まれたのではなく、リャザンで、自国の硬貨鑄造の前に、キプチャク汗国の銀貨を広く用いていたリャザンにおいて生まれたと考えられる。キプチャク汗国の《dirhem》が広くリャザン公国に浸透していくのは、14世紀の60年代になってからである。その流れはパヴォーリジエ（Поволжье）の1.59gの《dirhem》とアザーック（Азак）の1.36gの《dirhem》の混合物として形成された。《алтын》を構成する3《морток》（2.94g）と、当時のジュチの硬貨2つの平均値を比べてみると、《алтын》という用語は、最初リャザンにおいて、タタールの2《dirhem》に相当するものとして用いられたと考えられる。1《алтын》は6《белок》とロシア語に訳される。もしこの訳が正しければ、ジュチの2《dirhem》とリャザンの硬貨のない時代のシステムの6ヴェーヴェリツァ《веверица》が偶然一致したことと、この用語が生まれたこととは関係がある。《денга》という用語も、リャザンで、鑄造硬貨という全般的な意味で生まれ、ルーシ全域に広まったと考えられる。

モスクワ圏での硬貨鑄造はキプチャク汗国のハーンの意味に反して行われた。3大公国の早期のコインはそのことを物語っている。早い段階のモスクワ硬貨は名前が刻まれていなかった。大公の称号は刻まれていたが、その名は刻まれなかった。裏側はジュチのコインの模倣であった。ドミートリー・ドンスコイの名前はクリコヴォの戦い以降ようやくモスクワコインに現われた。リャザンの《денга》のタイプも同じプロセスをたどっている。リャザンの硬貨鑄造は14世紀80年代に、オレーグ公とトフタミーシ（Товтамыш）ハーンとの密接な関係の上に始まった。1380年の改革の後、1.42gを有するジュチのコインを模倣してつくられた。その後、モンゴルのコインを真似て、コイン製造職人は自分のイニシャルを打ち込んだ。最終的にオレーグ公とトフタミーシとの決裂ののち、また14世紀80年代の後半の、モスクワ-リャザン同盟の結成の後、文字の刻印は公国の国旗になった。ニジェゴロドの鑄造も、モンゴルのコインにならって名前のないところからはじまった。14世紀の終わりになってはじめて公の名前は現われた。

#### [5] モスクワシステムとノヴゴロドシステムの融合

1409年か1410年の間にノヴゴロド人とプスコフ人は初めて貿易‘金’の代わりにコインを導入した。自国のものではなく、西ヨーロッパのものである。バルト海沿岸の国（リガ）で用いられていた銀貨ペニャズィ《пенязи》とアルトゥーギ《артуги》である。

ノヴゴロドとプスコフのモスクワシステムからの隔離は長い間は続かなかった。ノヴゴロドでは1420年に終わりを遂げる：

《начаша новгородци торговати денги серебряными, а артуги попродаша немцом, торговали ими 9 лет. ノヴゴロド人たちは銀貨で商いをし始めた。ドイツ人によって売られたアルトゥーギによっては9年間交易を行った。》（НПЛ С.412）

ノヴゴロドでの自国の硬貨の導入はヴァシーリー・ドミートリエヴィッチの 0.789 g のモスクワ基準を受け入れることで始まった。この重さはノヴゴロド独立の間の 1478 年までノヴゴロド《денга》の基準であった。受け入れられたモスクワ基準は 15 世紀のノヴゴロドの謎かけ的な硬貨システムを説明するものである。モスクワで《денга》の重さの基準を取り入れ、自国の рубль の変わらぬ重さ 170.1g と、グリヴナの基本的な構造を保存した。15 世紀の資料では 1 《бела》は 2 《денга》に相当した。一方 13 世紀の《гривна》においては 7 《бел》であった。このことから、ノヴゴロドの硬貨グリヴナは 14 《денгам》に相当した。15 世紀のノヴゴロドシステムは次のとおりである。

$$\begin{aligned}
 (12) \quad 1 \text{ ルーブル (рубль)} &= 15 \text{ グリヴナ (гривнам)} + 6 \text{ デーンガ (денгам)} \\
 &= 216 \text{ デーンガ (денгам)} = \text{銀 } 170.1\text{g} \\
 1 \text{ グリヴナ (гривна)} &= 14 \text{ デーンガ (денгам)} = \text{銀 } 11.04\text{g} \\
 1 \text{ デーンガ (денга)} &= \text{銀 } 0.79\text{g}
 \end{aligned}$$

このシステムは、モスクワ公国への併合後も、公国の北部地域で存続した。15 世紀後半、モスクワ公国での主要域でのシステムは以下のとおりである。

$$\begin{aligned}
 (13) \quad 1 \text{ ルーブル (рубль)} &= 10 \text{ グリヴナ (гривнам)} = 200 \text{ デーンガ (денгам)} = \text{銀 } 78.9\text{g} \\
 1 \text{ グリヴナ (гривна)} &= 20 \text{ デーンガ (денгам)} = \text{銀 } 7.89\text{g} \\
 1 \text{ デーンガ (денга)} &= \text{銀 } 0.395\text{g}
 \end{aligned}$$

(12), (13)は最終的にノヴゴロドの《денга》は、モスクワ ルーブルの 100 分の 1 として、モスクワの通貨単位の中に組み込まれる一つのロシア国家の金融システムに統一される。

$$\begin{aligned}
 (14) \quad 1 \text{ ルーブル (рубль)} &= 10 \text{ グリヴナ (гривнам)} \\
 &= 100 \text{ モスクワデーンガ (новгородским денгам)} \\
 &= 200 \text{ モスクワデーンガ (московским денгам)} \\
 &= \text{銀 } 78.9\text{g} \\
 1 \text{ グリヴナ (гривна)} &= 10 \text{ モスクワデーンガ (новгородским денгам)} \\
 &= 20 \text{ モスクワデーンガ (московским денгам)} = \text{銀 } 7.89\text{g} \\
 1 \text{ モスクワデーンガ (новгородская денга)} &= \\
 &= 2 \text{ モスクワデーンガ (московская денга)} = \text{銀 } 0.79 \text{g} \\
 1 \text{ モスクワデーンガ (московская денга)} &= \text{銀 } 0.395\text{g}
 \end{aligned}$$



#### 4.まとめ

3.で詳しくみてきた B.Л.ヤーニンによる12世紀から15世紀の通貨システムの流れを次のように整理することができる。

##### モスクワシステム

[12世紀]

$$1\text{гс} = 4\text{гк} = 80\text{н} = 200\text{к} = 196.2\text{g}$$

гс: гривна серебра

гк: гривна кун

н: ногата

к: куна

$$1\text{гс} = 4\text{гк} = 196.2\text{g}$$

$$1\text{гк} = 20\text{н} = 49.15\text{g}$$

$$1\text{н} = 2.5\text{к} = 2.45\text{g}$$

$$1\text{к} = 0.98\text{g}$$

[13～14世紀]

$$1\text{гс} = 10\text{г} = 100\text{ре} = 200\text{м} = 196.2\text{g}$$

г: гривна

ре: резана

м: мортка

$$1\text{гс} = 10\text{г} = 196.2\text{g}$$

$$1\text{г} = 10\text{ре} = 19.62\text{g}$$

$$1\text{ре} = 2\text{м} = 1.96\text{g}$$

$$1\text{м} = 0.98\text{g}$$

[15世紀]

$$1\text{р} = 10\text{г} = 200\text{д} = 78.9\text{g}$$

р: рубль

г: гривна

д: денга

$$1\text{р} = 10\text{г} = 78.9\text{g}$$

$$1\text{г} = 20\text{д} = 7.89\text{g}$$

$$1\text{д} = 0.395\text{g}$$

##### ノヴゴロドシステム

[13世紀]

$$1гс = 15г = 105н = 420к = 196.2 g$$

г: гривна

н: ногата

к: куна

$$1гс = 15г = 196.2 g$$

$$1г = 7н = 13.08 g$$

$$1н = 4к = 1.87 g$$

$$1к = 0.467 g$$

[14 世紀]

$$1р = 13г = 91бе = 364к = 170.1 g$$

р: рубль

г: гривна

бе: бела

к: куна

$$1р = 13г = 170.1 g$$

$$1г = 7бе = 13.08 g$$

$$1бе = 4к = 1.87 g$$

$$1к = 0.467 g$$

[15 世紀]

$$1р = 15г + 6д = 216д = 170.1 g$$

р: рубль

г: гривна

д: денга

$$1г = 14д = 11.04 g$$

$$1д = 0.79 g$$

(14 世紀の 16е = 2д)

### 15 世紀半ば統一されたシステム

$$1р = 10г = 100 \text{ нов. д} = 200 \text{ мос. д} = 78.9 g$$

р: рубль

г: гривна

нов. д: новгородская денга

мос. д: московская денга

$$1г = 10 \text{ нов. д}$$

$$= 20 \text{ мос. д} = 7.89 g$$

$$1 \text{ нов. д}$$

$$= 2 \text{ мос. д} = 0.79 g$$

$$1 \text{ мос. д} = 0.395 g$$

我々の課題であるサトコーの掛け金《денежок тридцать тысячей》の考察に戻りながら、3であきらかになったことがらを整理すると次のようになる。

- ③ 11 世紀の硬貨としてクーナ《куна 銀 0.98 g》とグリヴナ《гривна 銀 49.05g》

が存在した。

- ④ 硬貨鑄造までの移行期(モンゴル襲来までの13世紀の初めから14世紀にかけて)《мортка 銀 0.98 g》が《куна》に代わるものとしてモスクワ圏で用いられた。
- ⑤ 硬貨のなかった12世紀の初めから、銀塊(слиток)が大きな取引の通貨として造られるようになった。13世紀の後半には全ルーシにおいて北方方式の銀塊グリヴナ銀《гривна серебра (196.2g)》のみが造られはじめ、その製造は1316年まで続いた。
- ⑥ 銀塊の一種 рубль (170.1g)は13世紀ノヴゴロドで現われた。ノヴゴロドは銀塊製造の中心地であった。ノヴゴロドで硬貨の製造が始まったのは、1420年のことである。銀塊 рубль の鑄造は1448年までであるから、1420年以降銀塊 рубль と硬貨 рубль が、30年足らず同時に製造されていた。
- ⑦ 《денга》という単位はリャザンで生まれ、ルーシ全域に広まった。ノヴゴロドシステムの中で使われだしたのは15世紀に入ってからである。その重さは0.79gであり、単位は《денга》である。これはモスクワ基準を受け入れたかたちでの鑄造で、ノヴゴロド独立の間の1478年までノヴゴロド《денга》の基準となった。

これらの詳細と、①、②を考慮しながら、次の結論を導くことができる。

## 5. 結論

サトコーの商売の主要相手国として、キプチャク汗国とモスクワが挙げられていることから、モスクワがキプチャク汗国とのかけひきの中で台頭をしてきた時期の出来事であると理解することが可能である。この時期はとりもなおさず、ノヴゴロドの衰退への移行期であった。1478年のモスクワへの併合までの期間を想定できる。

上のまとめでみてきたように、15世紀初めまでノヴゴロドでは銀塊(слиток)しか鑄造されていなかった。銀塊は小さめの рубль であっても170.1gの重さをもつものであるから、《денежок》という小さなものの多数の集まりの指小形で表現するのは不自然である。ノヴゴロドで硬貨の鑄造が始まった1420年は、1380年のクリコヴォの戦いに勝利した後のモスクワの活性期にあたり、モスクワからの波及を受けながらの硬貨鑄造の開始であった。その貨幣単位は《денга》であり、指小形で示された《денежки》と一致する。このことより、《денежок》は抽象的に‘お金’を表す言葉ではなく、その時用いられていた貨幣単位《денга》であると解釈することが可能である。この仮説が正しければ、フィリーナ『サトコー』の時代背景を、1420年からノヴゴロド独立の最後の年、1478年の間であると仮定することができる。この時期、硬貨鑄造のために、多くの銀が必要であったことが考えら

れる。キプチャク汗国から持ち帰った大樽の中の銀は、まさにそのために必要なものであったのかもしれない。国際商業都市ノヴゴロドの歴史の中では、最後の繁栄の時代が、このブイリーナの中で美しく描かれていると解釈することができるであろう。

サトコーが賭けに自ら負けようとした際の言葉(2)をもう一度思いおこしてみよう。

А й как пусть побогатее меня славный Новгород,  
Что не мог не я да повыкупить  
А й товаров новгородских,  
Чтобы не было продажи да во городи;

誉あるノヴゴロドよ、我より豊かであれ  
町中に商うものがなくなるまで  
ノヴゴロドの商品を  
我が買い尽くせることのないように

この言葉の中には、「どうかノヴゴロドよ、永久に誇高く、永久に豊かで在り続けるように。」という、語り手の願望が込められているように思えてくる。

さて、《дедежок тридцать тысячей》を銀に換算してみよう。ノヴゴロド《денга》は0.79gであるから、三万《денга》は総量23700g（23kgと700g）の銀貨に相当することになる。

造られ始めた新しい硬貨の額としては、文字通り‘великий залог（大きな賭け）’と言えるのではないだろうか。

## 参考文献

- Арциховский А.В. Новгородские грамоты на бересте(Из раскопок 1952 г.).М.:АН СССР, 1954.  
Арциховский А.В. Новгородские грамоты на бересте(Из раскопок 1958-1961гг.). М.: АН СССР, 1963.  
Большая советская энциклопедия. М.: Советская энциклопедия, 1970-1978.  
Вернадский Г.В. Монголь и Русь. Тверь:Леан; М.:Аграф, 2000.  
Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. М.:Тера, 1998.  
Ключевский В.О. Курс русской истории. М.:Мысль, 1987.  
Круглов Ю.Г. Былины. М.:Просвещение, 1993.  
Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. Полное собрание русских

福安佳子

летописей. Т.III. М.:Языки русской культуры, 2000.

Новгородская четвертая летопись. Полное собрание русских летописей. Т.IV. М.:Языки русской культуры, 2000.

Словарь русского языка XI-XVII вв. Вып.22. М.:Наука, 1997.

Советский энциклопедический словарь. М.:Советская энциклопедия, 1987

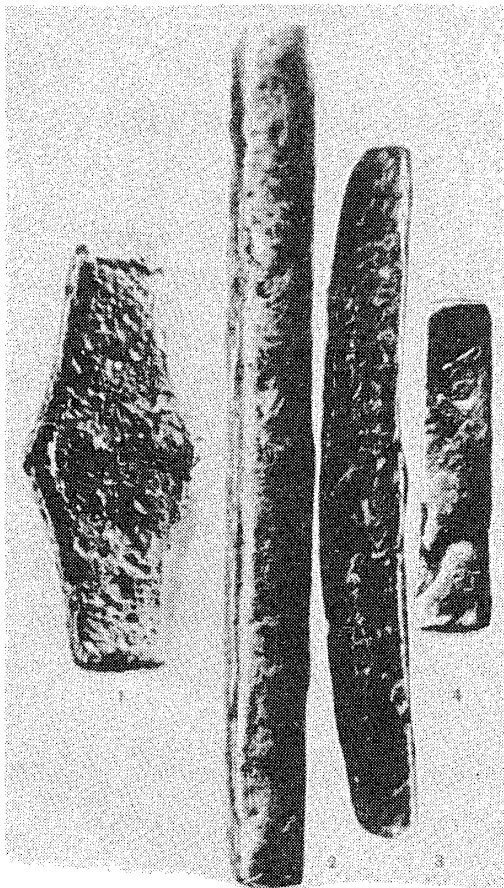
Янин В.Л. Деньги и денежные системы // Очерки русской культуры XIII-XV веков. Часть 1.

Материальная культура. М.:МГУ, 1969. С.317-347.

佐藤靖彦編著『ロシア英雄叙事詩の世界』新読書社, 2001年.

## 資料 1

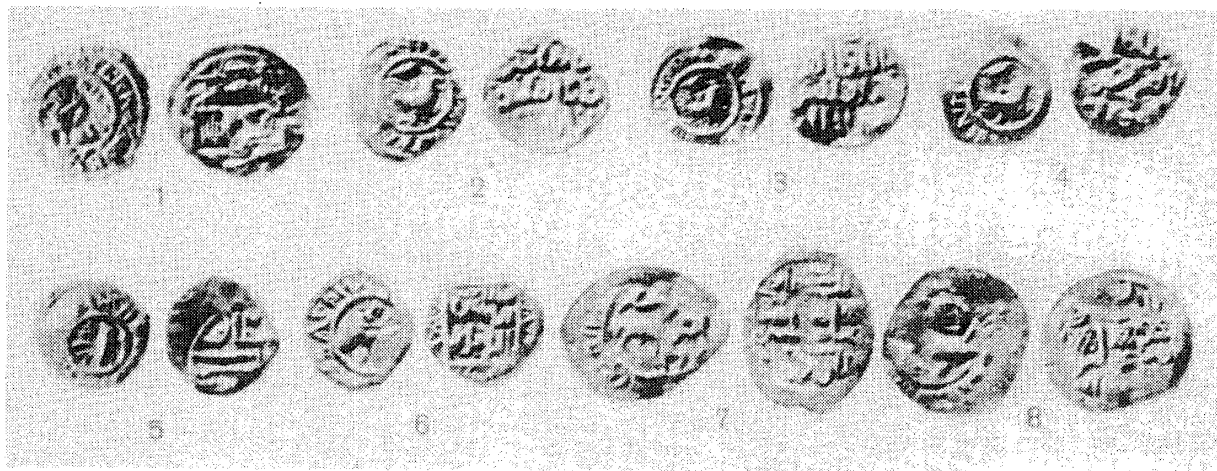
銀塊



- 1 : キエフの六角塊 (русская литра)
- 2 : ノヴゴロドの長い塊 (гривна серебра)
- 3 : ノヴゴロドの短い塊 (рубль)
- 4 : 刻印された半ルーブル塊 (полтина)

資料 2

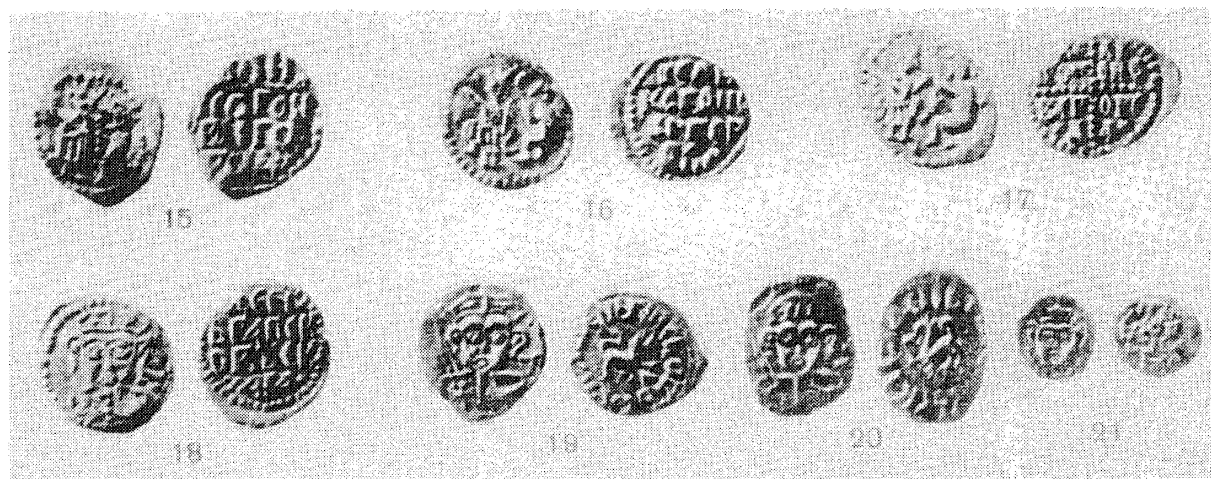
モスクワ硬貨



1-6：ドミートリー・ドンスコイ硬貨（1389年まで）

7-8：ヴァシーリー・ドミートリエヴィッチ硬貨（1389-1425）

資料 3



15-17：ノヴゴロド硬貨（Великий Новгород）

18-21：プスコフ硬貨

В.Л.Янин. Деньги и денежные системы(1969) С.320-321. より

Сколько стоили «денежек тридцать тысячей»,  
о которых “ударил” Садко?

— Денежные системы на Руси XII - XVвв.—

ФУКУЯСУ Ёсико

В былине «САДКО» встречаются несколько выражений, по которым мы можем узнать о денежном обращении того времени в Новгороде. В том числе «денежек», которое употребляется вместе с числом «тридцать тысячей». Что это — денежная единица или обозначает чеканную монету?

Согласно исследованию денежной системы на Руси XII–XVвв. выдающегося историка В.Л.Янина, существовали две основных ветви денежной системы: московская и новгородская. Когда обе ветви слились в XV веке, были установлены общие денежные единицы «рубль» и «деньга».

Можно предположить, что былина «САДКО» родилась на фоне упадка Новгорода и усиления Москвы в первой половине 15 века, до того как Новгород еще не был объединен с Московским государством, но когда в Новгороде уже началась чеканка монет.

Тогда новгородская деньга имела вес 0.79г. серебра. Мы можем подсчитать сколько стоили «денежек тридцать тысячей».